

北海道開拓のききがけ*

THE PIONEERING OF HOKKAIDO

篠田哲昭**中尾務***早川寛志****

BY Tetuaki SHINODA, Tutomu NAKAO and Hiroshi HAYAKAWA

概要

『蝦夷地』から『北海道』へと名づけられ、開拓が始まったのは明治以後の和人によるものであるが、それ以前の『蝦夷地』は主にアイヌ民族が住んでおり、狩猟・漁労とわずかな農耕とによる採取経済の原始生活共同体社会であり、それぞれの集落間で互いに必要な物資の交換によって生活する、いはゆる、小地域的な閉鎖社会であったことが、語り継がれている。

これらの交易のための産物の移動は、主に沿岸や河川による水運と陸路の交通網によって行われた。時代が進んで近世以前（松前藩設置以後）には、北の蝦夷地と和人との交易が松前藩の統制下で、近江商人の手によって商品の流通が盛んに行われ、そのために河川舟運と海運とを結ぶ河口の港湾都市が発展してきた。

アイヌ語で ル, ru (道)、ペッ, ナイ, pet, nai (河または川) などの地名が現在も使われているのは、当時の主要交易拠点であった所が多い。

本報告は蝦夷地と各地との交易（経済行為）の発展にともなって自然発生的に生まれた交通網が古代から中世・近世にかけて発展してきた様を地名の由来と古老の口伝やユーカラ（叙事詩）等の伝承を手がかりに調査・踏査し、その概要を取りまとめたものである。

1. はじめに

北海道の先住民族について、遺跡などの調査資料を基に生活（交易・漁労・狩猟）の痕跡を辿ってみると、およそ 20,000年～18,000年前（先土器時代：ウルム氷期最盛期）に遡ることができる。この時期は北からの寒波に追われ、南下する草地限界を追って、マンモス動物群、黄土動物群などの食料源とともにシベリア大陸から当時の陸橋をわたって、樺太、アリューシャン列島、氷結したオホーツク海を経由し、北海道各地に先土器時代（石器時代）を代表する動物の骨や「ナイフ形石器」などが出土している。

それ以降の北海道の考古学編年をたどってみると、(BC)7,000 年頃から縄文早期の文化層が見られ、前期、中期、後期、晩期と縄文時代が7,000年間ほど続き、(AD)0～500 年頃までの続縄文、さらに(AD)1,200 年頃までの擦文式土器時代を経て、その境界は判然としませんがアイヌ文化の時代へと移り変わる。アイヌ文化以前の遺跡には文字はもちろんのこと言葉もない、しかし、出土した環境や遺物からは我々に非常に多くの疑問や情報を投げかけてくれる。科学的とはいえ、現在の我々の知識の範囲による推定ではあるが、遺物の中で特に目につくのは、黒曜石で作られた石器である、北海道内における黒曜石の産出地は

*KEYWORD 交通・運輸

**正会員 北海道建設工学専門学校
(〒065 札幌市東区北5条東8丁目1-35)

***正会員 北海学園大学工学部

****正会員 北海学園大学教授工学部土木工学科

2～3の場所に限られており、それぞれの鉱物学的・岩石学的な特徴から明らかに交易あるいは戦利品とみられ、さらに加工の技術やその手法にいたるまで、全道の同時代の遺跡に広く行きわたっている。さらに、装飾あるいは呪術・祭司に用いられたと思われるヒスイの曲玉にいたっては、新潟県糸魚川産のものが出土しており、同様にシベリア大陸産のコハク等、当時の交易の規模は、現在の我々が考え得る推定の範囲を大きく越え、驚嘆に値するものがある。

アイヌ文化を、何をもって明確に定義づけるかについては、種々論議のあるところであるが、一般に樺文文化以降の中・近世でオホーツク文化とオーバーラップした時代にアイヌ文化に通ずるいくつかの事例を見ることができる。ユーカラの発生もこの頃と思われ、同時代の南サハリンやアムール下流域との文化の共通点など、遺物や信仰儀礼・伝承の中に見受けられる。

アイヌ語で「AINU」とは「人」の意味であり、我々がアイヌ文化を理解する最強の接点は言葉である。アイヌの人たちと和人との間に意志の疎通が行われ、和人の探検家や交易のための商人との接点が ru・・・「道」であり、pet, nai・・・「河・川」であった。アイヌの人たちの案内によって正確な地図を作ることができ、諸外国との位置関係などが明らかになり、ロシアの南下政策、イギリスや諸外国の植民地政策に対処する北防警備はもとより、拓殖のための耕地など、全道くまなく網羅することができたのである。

2. アイヌが通った道

アイヌの人たちが通った道が地名になって居るところが多いことは先に述べたが、上川アイヌの一例を挙げると、旭川の近郊に剣淵という地名があるが、語源はマツシネプチ（冬の道：国道39号線、塩狩峠）とサカシネプチ（夏の道）の合流点に剣淵川がある。古老からの聞き取りに従って歩いてみると、冬の道は現在の国道39号線の塩狩峠に近く、夏の道はかつては獣道であったであろうと思われる見晴らしの良い高巻きの道であった。このように、冬の道・夏の道と区別していたルートが幾つかあるが、一般に夏の道は河川の増水に影響されない地形を通り、冬の道は渇水期の河道に近い、吹雪の時にも迷うことなく、しかも、欧穴などの身を寄せることができるルートであったであろうと窺われる。

川についてはアイヌの人たちは現在の我々とは逆の発想である。川は海に流出するのではなく、「山へ入る」と考える。地名にシノマンベツ「遙か山奥へ入っていく川」、リコマベツ「高いところへいく川」とあり、右岸・左岸も上流に向かって右・左、水源はベラトカ「川の行く先」と言う。これは海洋民族であったアイヌの人たちが海岸を拠点として生活し、川伝いに内陸へ入った、と言う説がある。

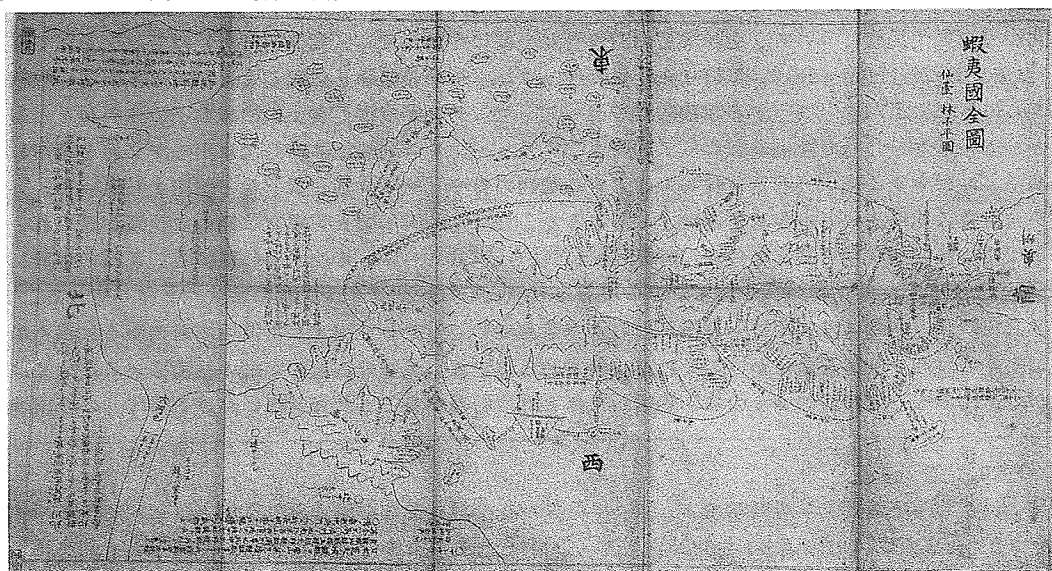


図-1 蝦夷国全図 林子平図（早川寛志所蔵）

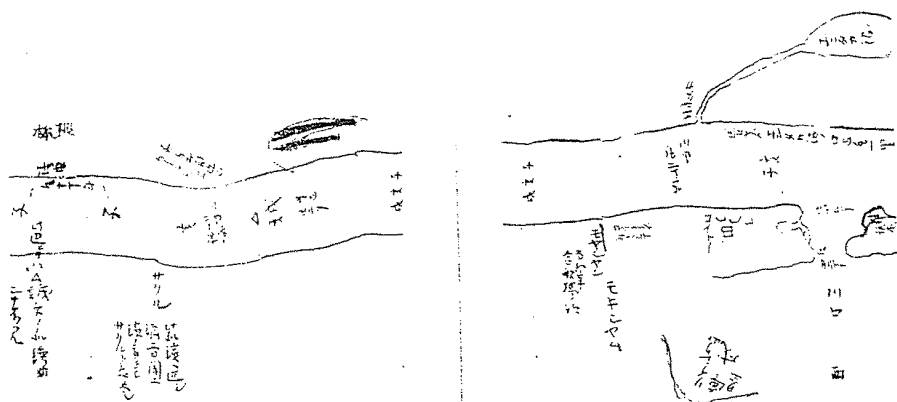


図-2 天塩川河口（近藤重蔵図 大日本近世史料より）

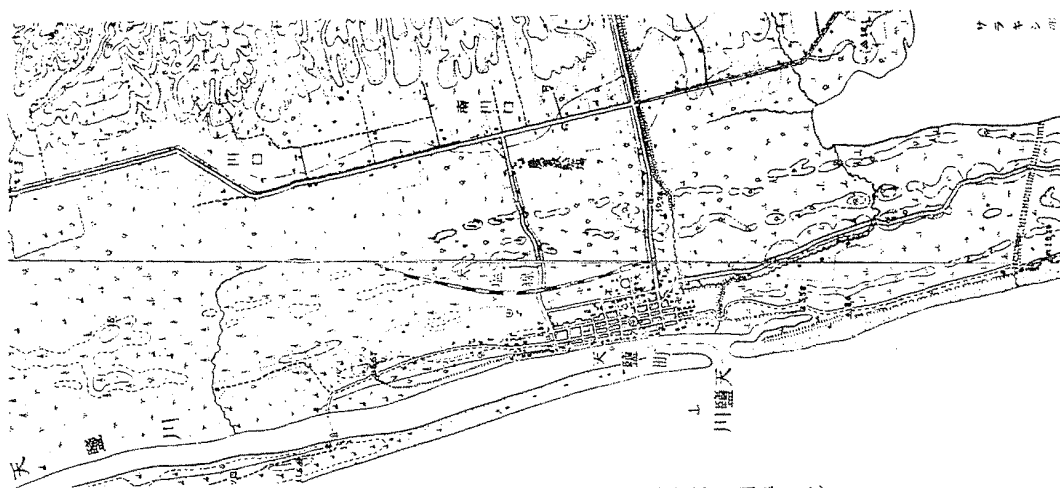


図-3 天塩川河口（昭和22年 地理調査所発行 5万分の1）

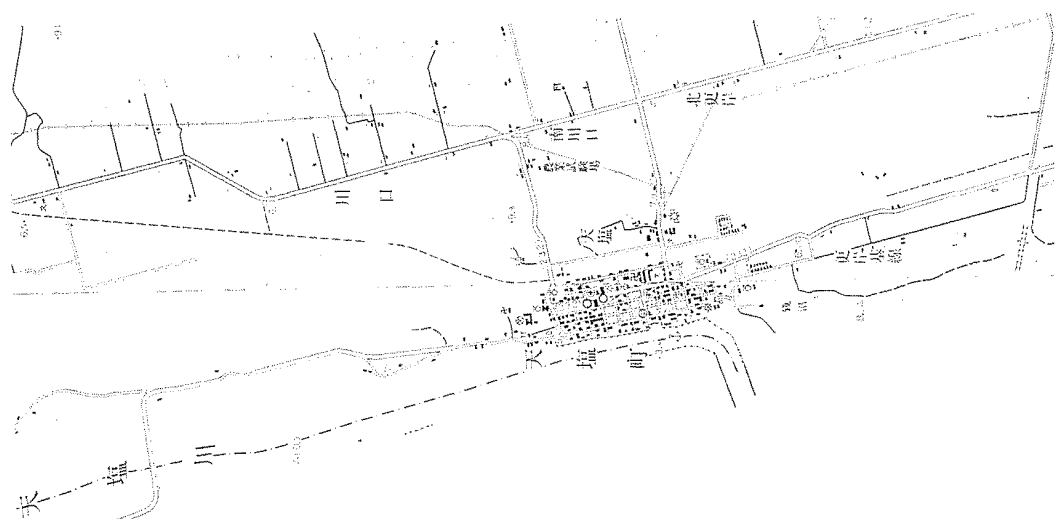


図-4 天塩川河口（平成5年 国土地理院発行 5万分の1）

3. 和人の探検家たち

1603年、家康は征夷大將軍に就任した。家康は蠣崎氏に北高麗（韃靼）、奥狄（樺太）について語った。翌年蠣崎慶広「松前志摩慶広」は家康から『蝦夷交易の制三章』と呼ばれる下記の「定」（黒印状と呼ばれる）を賜った。（徳川実紀、北海道史）

- 一 諸国より松前へ出入りの者共、志摩守に相断らずして、夷仁と直ちに商買仕る儀曲事たるべき事、
- 一 志摩守に断り無くして渡海せしめ売買仕り候者、急度言上致すべき事、
- 付、夷の儀は何方へ往行候共、夷次第に致すべき事、
- 一 夷仁に対し非分申し懸けるは堅く停止の事、

松前藩は上記の恩典に甘んずるのみで、北の防備にはむしろ無関心を装ったため、幕府は1799年東蝦夷、1807年には西蝦夷を直轄地として蝦夷奉行を置いた。

この後、多くの探検家が蝦夷地を訪れ、多くの調査報告書や日誌を残している。なかでも近藤重蔵の「遼要分界圖考」には次のような報告がされている。

東西蝦夷地ノ奥東ハチュブカ諸島ヨリ魯西亞カムサスカ境ニ至リ西ハカラフト地方ヨリ満州山丹境ニ至ルマデ古今未ダ其地理ヲ極ル者ナク史冊及ヒ唐蛮ノ書ト雖モ未ダ悉ク其地理ヲ辨ズルモノヲ聞ズ蓋シ極北ノ絶海戎夷ノ巢窟耳目ノ常ニ聞見セザル所ナレバナリ然リト雖モ邊塞ノ地理明カナラザレバ折衝ノ略施スニ術ナシ是臣重ガ最モ心ヲ用ユル所以ナリ寛政十年戊午臣富奉命シテ蝦夷ヲ巡按ス越テ庚申エトロフヲ開島ス時ニチュブエカ夷人イチヤングムシ來テ投化スイチヤングムシ屢カムサスガエ往來シ能ク地理ヲ暗記ス是ニ於テ初テ東方諸島ノ地理ヲ詳ニスルコトヲ得タリ西夷カラフト地方ノ奥満州山丹境ニ至リテハ蝦夷及ビ山丹人ノ語トコロ齟齬異同未ダ一定ヲ得ズ是ニ於テ廣ク諸書ヲ参考シ偏ク圖誌ヲ檢閲シ且漂民ノ言ニ據テ初テ其梗○ヲ得タリ （後略）

4. むすび

「アイヌには文字が無かった、従って歴史がない」この言葉に反論して知里真志保氏は「彼らの言語こそ文字に勝る歴史である、筆は時に事実を歪めて伝えがちであるが、言語は全くありのままを伝える。」北海道の自然に培われたアイヌの人たちの自然観には、むしろ原始宗教に近いものを感じる。鮭をカムイチュブ「神魚」と称し、「真魚」と称したのは、彼らにとって鮭は主食であり、不漁の年は飢饉といったユウカラの中に「下方の群れは、川底の石がこすり、上方の群れは天日が焦がす」昔、川には鮭が満ちあふれていた、と言うのは決して誇張ではないとおもわれる。これは筆者が子供の頃、鮭が群来てきて水面が盛り上がりうねりが消えて水面から水底までが鮭で満ちあふれていた光景を思い出すからである。

彼らの世界では、海でも山でも獲物はすべて自然からの贈り物であり、特に、熊と鮭は神様が乗り移り熊の肉と鮭をお土産に持ってきてくれる。従って、必要な量だけしか獲らない。そうすると神様は決して手ぶらでくる事はない。

二月の寒風のなか、「冬の道」を辿りながら、かつてこの道を毛脛に氷のつららの音を聞きながらチェップケリ（鮭の皮で作った靴）を履いて土産をもって往復したと言う古老の話を思い出して、なぜか目頭が熱くなったのを、まるで昨日の事のように思い出すのである。

この報告は概報であり、各地の詳細については、次回にゆずる。

参考文献

- (1)「北海道5万年史」：郷土と科学編集委員会
- (2)「大日本近世史料」：東京大学史料編纂所
- (3)「新撰北海道史」：北海道庁
- (4)「近藤正斎全集」：図書刊行会
- (5)梅木通徳：「北海道交通史論」北日本社